

Index

## Links

## UPLINK FACTORY

〒150-0042

東京都渋谷区宇田川町37-18

TEL:03-6825-5502

FAX:03-3485-8785

## ■ 032\_浅井 隆/ASAHI TAKASHI

有限会社アップリンク 取締役社長

1955年4月18日大阪生まれ。血液型O型。

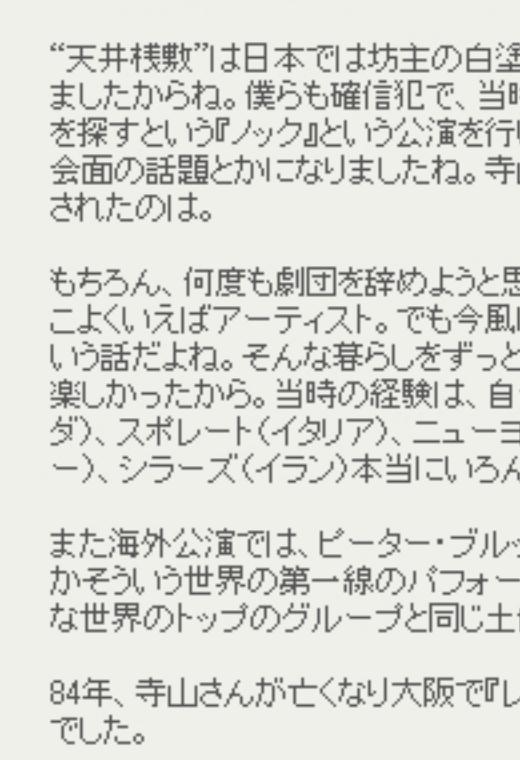
アップリンク主宰。プロデューサー

大阪府立池田高校卒業後上京し、74年、演劇実験室「天井模敷」に入団。84年、寺山修司の他界による劇団解散まで舞台監督を務める。87年、有限会社アップリンクを設立。映画以外では、テレビドキュメンタリー、連続テレビドラマ『CX』90日間トネム・パブ』などの演出を手がける。95年、映画の上映、イベントなどを行うスペース「アップリンク・ファクトリー」をオープン。99年には、BBGとの共同製作作品『愛の魔窟』(ジョルジ・エリック監督・坂本龍一音楽)がカンヌ国際映画祭の「ある視点部門」に正式出品。2000年にはシェリー・J・チャン監督のJapanese Sci-Fi Porn Future『I.K.U.』を製作。サンダンス映画祭を皮切りに世界中で20以上の映画祭で上映される。同年、中国の新銅ロウ・イエ監督『ふたりの人魚』に製作出資。03年にはプロデュースした黒沢清監督の『アカルミライ』が、カンヌ国際映画祭の「コンペティション」に出品され話題となる。

また、書籍、雑誌の出版もおりて、93年1月から2000年3月まで、映画・音楽・アートなどを扱った月刊誌『船子(ダイス)』の刊行。書籍ではベストセラービジネス書籍『マルコムX自伝』、『ロバート・メイプルソープ写真集』ティム・バートンの『オイスター・ボーンの恋姦死』『バティスマス完全版』などを発行する。

2005年5月に、涉谷区宇田川町にてデジタルシネマ「アップリンクX」と多目的イベントスペース「アップリンク・ファクトリー」、「アップリンク・ギャラリー」そしてカフェ・レストラン「タベラ」を一カ所に集めた総合カルチャーセンター「スペースオーブン」をオープン。

最近の映画製作では手塚敏監督『ラックキス』で共同プロデューサーを務め、矢崎仁司監督『ストロベリーショートケイクス』をプロデュース。またセザン・ボドロフ監督『モンゴル』では日本サイドのプロデュースを担当。出版においてはマシュー・バーニーデザインによる『MATTHEW BARNEY: DRAWING RESTRAINT VOL.2』を編集、発行する。



## 「天井模敷」時代

高校生の時に大阪のサンケイホールで『邪宗門』というタイトルの演劇があって、すごい衝撃を受けました。それ以降劇場内をスマーカーが立ち始め、俳優たちがステージからアジテーションをする暴力的で呪術的なステージだった。当時「黒テント」とか「紅テント」とか観たものだけだ。庄倒的に『天井模敷』がかっこよかったです。天井模敷は雑誌の平凡パンチに海外公演のグラビアが掲載されていたし、ウッドストックとか同時代の世界につながっている魅力を感じました。

それで、天井模敷に入りたいと思い高校卒業後すぐに東京に出てきました。口実は東京芸大をとりあえず受験するということを白にあります。すばやく美術学院でデサン描いていました。夏頃にちょうど法政大学の学館ホールで『盲人書簡』という本当に何も見えない暗闇の中でマッチの明かりが点けて進められる公演を観て、そのときのチラシに劇団員募集の告知があったので入団試験を受けました。仕送りをもらつた後期の授業料を学校に支払わず生活費にあてていましたね。それが7年の事でした。

当時は、いわゆるサブ・カルチャーは、ロックとかジャズとか映画、舞台、ダンス、アート、写真、ファッションなどとかがみんな今ほど細分化されてなくて、みんないっしょくたっていました。『天井模敷』っていう劇団にはそういうものが全部あった。

18歳に入団して28歳まで、84年に寺山さんが亡くなつて劇団が解散するまで10年間舞台監督をやっていました。今でこそ、日本の劇団が海外で公演したり、海外からアーティストも普通にやってきたりする時代になつたけど、当時は海外公演なんかすらする劇団ってほとんどなかった。僕が最初に海外に行ったのは天井模敷が社会的に認められて伝説化されたのは。

ただ、海外公演ツアーといつても、そんなにかっこいいものじゃなくて、わざわざサリ。ギャラなんかないで食べて食費だけもらっていましたね。でもホテルに泊まって寝るところと食うところが保証されていたんで、日本にいるよりは生活は楽でしたね。海外に行くと王室に招待されたり、アーティストなのでゲスト扱いされたりと特別待遇でも日本に帰ると家族の滞納が待っていて、三晩一間で風呂なしの生活。劇団からはギャラどころか交通費ももらえないし、その上劇団には毎月維持費として5,000円を支払わなくちゃいけない。僕はビル掃除とか大道具のバイトとかやりながらやって暮らしていました。

『天井模敷』は日本では坊主の白塗りのアングラ集団って思われていたし、一般市民からも疎かに思っていたからね。僕らも確信犯で、当時阿佐ヶ谷一帯で『市街劇』と称して丸3日間、お客様が地図を持って劇を探すという『ピックル』という公演を行い、全身包帯を巻いた男が突然家庭にやってきたというので、新聞の社会面の話題とかになりましたね。寺山さんが亡くなつてからですよ、天井模敷が社会的に認められて伝説化されたのは。

もちろん、何度も劇団を辞めようと思いましたよ。食べないし、このままやっていてもどうすんだと思って。かっこよくいえばアーティスト。でも今風にいえばブーケローだ。30歳過ぎてもやってられるのかっていう話だよね。そんな暮らしをずっと続けられたのは、海外に行って、いろんな国の人文化や人に触れることが楽しかったから。当時の経験は自分にとってものすごく今プラスになっています。アムステルダム(オランダ)、スポーツ(イタリア)、ニューヨーク(アメリカ)、ロンドン(イギリス)、パリ(フランス)、ブラッセル(ベルギー)、シラーズ(イラン)本当にいろいろなところに行きました。

また海外公演では、ピーター・ブルック、モーリス・ペジャール、ロバート・ウェーラン、太陽劇団、カントールとかそういう世界の第一線のパフォーマーマークなど演劇祭で見つけたり。新作を競い合うというような世界のトップのグループと同じ土俵でやっていることが刺激的だった。

84年、寺山さんが亡くなり大阪で『レミング』という公演を最後に、劇団が解散することになりました。28歳の時でした。

## デレク・ジャークマンとの出会い

解散後、まずは自分の力を試したかった。できるのは演劇だったので仲間を集め、自分のグループを作ることにした。「アップリンク・シアター」という名前でした。ローリー・アンダーソンとかに影響を受けて、テレビモニターをいくつか10台使う公演でした。『L'Inutile』や『パウ公演』を中野のplan Bで行った時は、90分間天井から雨が垂れ流れて、床に水が溜まっていくというもの。最後の方では30センチ以上の水深になりお客様は椅子が島にならぬけなくなる。その雨の中で数10台のテレビが映っているのでちょっと間違えば感電死してしまうと思われる危険な事をやつていました。その後明治学院の教室、原美術館の庭など回公演をやつたんですが、天井模敷ブランドではなく自分で観客を集める限界を感じてそれ以上続けられませんでした。

その後、山本政志が『ロビンソンの庭』という映画を作るプロデューサーをやってくれてプロデュースを行った。当時ジム・ジャームッシュの『ストレンジャー・ラバーダイス』を見てそのカメラワークがいいという事で、今は監督ですけどトム・ディ奇口をカメラマンとして東京に呼んで映画を撮りました。

その後に、自分で配給といふ仕事をやってみようとデレク・ジャークマンの『エンジェリック・カンパニセーション』を輸入しました。契約金は当時のお金で5,000ドル。1ドル150円の時代だから、75万円ぐらいで権利を買いました。吉祥寺バウスシアターで上映しました。天井模敷での観客の動員方法しか知らないので、ポスターを作り、チラシを撒きまくり、一人で全部やつしました。その結果元手はなんとか回収できました。

その後に、デレクの短編作品を上映しようということになり、今の『シネクイント』、バルコのパートBにあった『スペース・パート』でまとめて上映するので、バルコと取引するには法人でないいけないという事で会社組むことになりました。87年のことです。

あのころはまだインターネットもなかったし、海外の映画の情報ってリアルタイムで入ってこなかった。音楽好きや、イギリス好き、ファッション好き、新しいアートフィルムを見たいっていう人たちが大勢来てくれました。

デレクの作品を色々と配給していくと、もう配給する作品が無くなつたので、今度は前に彼が作る映画に出資するようになつた『ザ・ガーデン』『アーヴィードワード』『ザ・ヴォート・ゲン・ジュタイン』『BLUE』とデレクが亡くなるまで4本の作品の共同プロデューサーを務めました。それぞれ、共同製作の相手はBBCとかチャンネル4とか、こっちには社員2、3人の会社、僕自身もへたくそな英語で悩むもの知らずでしたね。

デレクといふ人は本当にオープンマインドの人で彼を通して、現場のスペシャリストをはじめ、彼の友だちだったり、そのまま友だちだったり、たくさんの人を紹介してもらいつつ、どんどんロンドンでのネットワークが広がつてしまつた。

当時はデレクの映画の製作もあり年に何度もロンドンに行っていました。まあロンドンにちょっと詳しくなったので、デジタルの『NO NFT』という深夜のドキュメンタリーでロンドンのアーティストたちを紹介する番組を作りました。その縁で連続テレビドラマ『90日間トネム・パブ』を作りました。この物語はもともとアーティスト2人位の小さな組織だったからね。今アーティストが大きくなりすぎてしまうと、物語が面白くなくなつたから、『天井模敷』が亡くなつたからこそ新しいカムフラージュが生まれていたんだから。『天井模敷』はそんなふうにいろんなカムフラージュが一ヵ所に集まる場所にしたかったんです。

『天井模敷』は、アップリンクのことだけじゃなくて他の配給会社の情報もアートも音楽も、いろんなストリートのカムフラージュを取り上げた、総合カムフラージュ雑誌でした。この映画も音楽もアートもっていうのが僕にとって大事なポイントで、さっきも言ったけど、70年代でみんな同じ場所にいたんですね。それなら雑誌を自分で出せばいいんだと思った。その頃個人でもMacを使いワールドで編集出来るような時代に突入していました。まあ、Macも僕らが買える値段まで下がってきていたし、いってもメモリの増設、プリンタまで揃えると100万円は超えましたけど、とりあえずMac一式を購入して『船子』を創りました。94年のことです。

『船子』は、アップリンクのことだけじゃなくて他の配給会社の情報もアートも音楽も、いろんなストリートのカムフラージュを取り上げた、総合カムフラージュ雑誌でした。この映画も音楽もアートもっていうのが僕にとって大事なポイントで、さっきも言ったけど、70年代でみんな同じ場所にいたんですね。それなら雑誌を自分で出せばいいんだと思った。その頃個人でもMacを使いワールドで編集出来るような時代に突入していました。まあ、Macも僕らが買える値段まで下がってきていたし、いってもメモリの増設、プリンタまで揃えると100万円は超えましたけど、とりあえずMac一式を購入して『船子』を創りました。94年のことです。

『船子』は、アーティストの『船子』創刊号(94年)

『船子』創刊、多様なカムフラージュへのこだわり

その後、出版した『マルコムX自伝』がタイミングよくスクライクリーの映画の公開と重なり大ヒット。1,000万円ぐらいたったかな。そのお金で手狭になった目黒の事務所から渋谷に引っ越しました。

当時、『シティロード』っていう雑誌が月1回出していた。そこに『アップリンクニュース』という小さなお広告を毎号出していた。ちょうどセルビテロがお出で始めた時にで、配給作品とか書籍の出版とかを紹介するメディアが必要だったので、ある日それが休刊。宣伝する方法がなくなった。それなら雑誌を自分で出せばいいんだと思った。その頃個人でもMacを使いワールドで編集出来るような時代に突入していました。まあ、Macも僕らが買える値段まで下がってきていたし、いってもメモリの増設、プリンタまで揃えると100万円は超えましたけど、とりあえずMac一式を購入して『船子』を創りました。94年のことです。

『船子』は、アーティストのことだけじゃなくて他の配給会社の情報もアートも音楽も、いろんなストリートのカムフラージュを取り上げた、総合カムフラージュ雑誌でした。この映画も音楽もアートもっていうのが僕にとって大事なポイントで、さっきも言ったけど、70年代でみんな同じ場所にいたんですね。それなら雑誌を自分で出せばいいんだと思った。その頃個人でもMacを使いワールドで編集出来るような時代に突入していました。まあ、Macも僕らが買える値段まで下がってきていたし、いってもメモリの増設、プリンタまで揃えると100万円は超えましたけど、とりあえずMac一式を購入して『船子』を創りました。94年のことです。

『船子』は、アーティストのことだけじゃなくて他の配給会社の情報もアート